

生活語研究ということ

藤原 与一

岡山で、「方言研究会」ができたと思ったら、早くも「生活語研究」という雑誌が出た。そのぶあつい一冊をいただいて、私はおどろいた。どうこんなしごとができるようになったのか、と。

「生活語研究」とは、よい名をつけたものである。こんな誌名が、ぐしかに、できてよかったのだ。今まで、このよい名が、うもれていなか。岡山の、「方言研究会」のみなさんが、まじめに勉強しているうちに、こんなよい名を、はっきりとつかんだのだと思う。

○ ○ ○

生活語といえは、どんなものであろう。生活のためのことは、これが生活語だろう。

国文の先生がたのおへやに行くと、諸先生がこもごも話していらっやる。そのお話しのことばの全体が、先生がたの生活語にちがいない。人びとの生活語には、その生活語の世界の独自性があるとおもしろい。

カトリックのかたかたとお話しをしていると、すぐに、そのかたからの生活語と、生活語の世界の独自性とを感知することができる。事務室へ行けば事務室の。

そういう独自性に目・心に向けて、生活語というものを見るのが、生活語研究ということであろう。生活語研究！ やっておもしろいことである。

○ ○ ○

「方言」と言われる生活語の世界にはいつてみる。——いや、のぞいてみたのでもよい。すぐに、その生活語の世界の独自性を感知することができる。どうして方言はこう特殊なのだろうと、だれしも思うにちがいない。その特殊性・独自性にとりくむのが、方言研究と

いう生活語研究である。

方言研究には、いろいろの方法、やりかたがある。地理学的研究などは、古くから、さかんになされてきた。方法は、努力すれば、なほ限りもなく、いろいろと打立てることができよう。

どのような方法によっていくにしても、方言の特殊性・独自性の証明は、だいたいな目標とすべきである。生活語研究の花が、そこに大きく開くであらう。

(42.1.7.あさ)